

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(54) 平成14年9月1日

## 農学・本草学シリーズ

### 小野蘭山の『本草綱目啓蒙』(499.9/オ, K756/6)

小野蘭山(享保14(1729)年~文化7(1810)年)は江戸時代後期の本草博物学者で、名を職博とといいます。京都に生まれた彼は、生まれつき衣服の重さにも堪えられないといわれるほど虚弱体質のうえ病気がちだったといわれています。松岡恕庵について本草学を修めながら、京都の丸太町付近に衆芳軒を開きました。蘭山は簡潔をモットーとした師の松岡恕庵と博大精緻を学風とする稲生若水(恕庵の師)との中道を取り、中国の本草学から発達した日本の本草学・博物学を大成しました。蘭山は、寛政11(1799)年に幕府に招かれ江戸に行き、医学館で本草学を教えることとなります。それまでの本草学の中心は京都にありましたが、蘭山が京都から江戸に移ったことにより、本草学の中心地も江戸に移ったとされています。さらに、享和元(1801)年から文化2(1805)年まで、幕命により5回以上も諸国採薬旅行を行いました。この旅行は弟子が同行し、蘭山から実地の教えを受ける研修旅行という性格のものでした。

『本草綱目啓蒙』は、小野蘭山の本草学の集大成というべきもので、全48巻28冊からなり、孫の小野職孝が蘭山の口授の講義の筆記を整理し編集しました。初版は享和3(1803)年から文化3(1806)年にかけて刊行され、文化8(1811)年に再版され、さらに弘化元(1844)年、弘化4年(1847)にも刊行されました。当館所蔵資料は弘化4年に刊行されたものです。

植物等の記述形式・分類・排列は李時珍の『本草綱目』に従っているため、純日本産の諸品は排除されています。例えば日本産の「紫陽花」は『本草綱目』になく、『本草綱目啓蒙』にもとりあげていません。純日本産の諸品は、貝原益軒の『大和本草』には収められています。『本草綱目啓蒙』は、あくまでも医師・学者のための『本草綱目』の啓蒙書であり、益軒の庶民への啓蒙書とは視点・意図が異なります。

記載されている植物等は、方言名を含めた名称、産地、形状などについて詳しく解説されています。『本草綱目』の釈明(薬の別名や正名と別名の由来)・集解(産地や採集時期、採集方法、原色物の形状、古書の記録)について詳しく説明されていますが、逆に主治(薬の効用)・発明(不明な点に対する解釈)・附方(処方仕方)等はほとんどとりあげられていないのを見てもわかるように、博物学的記述として構成しています。しかし、図がない点と分類に独創性及び法則性に欠ける点に難があるといわれています。蘭山の文献研究と実地調査を重視する学問スタンスにより、掲載の自然物の方言が精力的にとりあげられており、『本草綱目啓蒙』は国語学上大変貴重な資料ともなっています。

#### 【参考文献】

- 『本草綱目啓蒙』東洋文庫 531(082/112)
- 『明治前日本生物学史1』(480.2/1)
- 『江戸の博物学者たち』(499.9/9)